

04・高級ホテルのビューバスで、全裸で窓に押し付けられて乳首責めセックス

トラック03の数時間後。

とある年の春。

五月十二日。十九時ごろ。

場所は主人公とシーラが本日宿泊する、高級ホテルの浴室。

天気は晴れ。室温は二十四度程度。

主人公とシーラは今、一緒にこのお風呂に入っている。

とても広いお風呂なのにぴったりと密着して、シーラが背後から主人公を抱きしめる形で、お湯につかっている。

SE1 浴室の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【0―7秒ほど流してSE2】

【その後、音量がとても小さくなる】

SE2 シーラがお風呂で身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

舞台はとても広いホテルの浴室。
編集で『お風呂加工』を入れる。

シーラ、背後から頭を出すと、主人公の頭を自分の方へ向けさせる形でキスをする。
主人公はそれに、夢中で応える。
今日もすっかり、シーラとの行為の虜になっている。

●正面 0センチ

「【※9回※】キスする。

たっぷり、ねっとりキスをする。

シーラは主人公の背後におり、主人公の顔をこちらに向けさせてキスしている】

あんむ……んっ……ちゅ♡

ちゅ……ちゅっ♡

ちゅぶぶっ……ちゅ♡
んんっく……ちゅ♡

【満足げに微笑む。

トラック03までとは一転して、主人公がとても素直かつ積極的に嬉しいので。

『達された』とは『イッた』という意味」

ふふ。お嬢様ったら。

達された後は、本当に甘えん坊さんなのですから……♡」

〈主人公〉

「だってもお四回もしたあ♡

まだ七時とかなのに♡

シーラもう四回もエロい事したあ……♡

ああんむ……ちゅ♡」

そう。そうなのだ。

先ほどの主人公が予想した『三度目の絶頂もさほど遠くないだろう』という展開は、あの後、半分当たって半分外れた。

つまり主人公は予想を超えてあの後二回。

本日、計四回に渡ってイカされたのだ。

三回目はうたた寝から目を覚ました後、ベッドの中ですぐに。

四回目は脱衣所で。三回目の行為中に全裸にされ、汗まみれでキスマークだらけになった身体を、どろどろに欲しがっている膣内を、丹念に犯された。

だが、そこまですれば、一般的にはもう精魂尽き果ててしまって、もう、その日はセックスする気になどならないような気がする。

しかし、もう何年も何年もシーラに好きにされ続けている主人公は、すっかり体力がついてしまっているようだ。

こうして、また飽きもせず……シーラとキスして、触られている。

●正面 0センチ

「【※8回※】キスする。

たっぷり、ねっとりキスをする。

シーラは主人公の背後におり、主人公の顔をこちらに向けさせてキスしている」

ああんむ……ちゅ♡

んんっ……くちゅっ♡

ちゅ。ちゅっ♡

ちゆるるるっ……ちゅっ♥

【※息づかいのみ※】で表現する。

うっとりのため息をつく】

はあ……♥「

〈主人公〉

「……はあ、はあ、はあっ……♥」

それどころか、主人公はずいぶんと勢いを取り戻しつつある。

このまままたなし崩し的にセックスされそうな雰囲気に対して、また、ささやかな『抵抗ごっこ』をして、シーラを煽る気にいる。

●正面 0センチ

「【穏やかに優しくたずねる。

主人公が何か言いたげなので。

『主人公は絶対、まだセックスしたいに決まっている』と、自分の予想に確信がある上で聞いている」

あら……？

如何（いかが）なさいましたか？ お嬢様……♡」

〈主人公〉

「あのねっ……？」

今、またシーラここでやる気になってるみたいだけどっ♡

もうしないっ。もうしないからねっ♡

これからご飯もあるし。

ここに来てからわたしたち、エロい事しかしてないじゃんっ……♡

もおっ♡ 絶対しないからねっ♡」

こうは言っても、シーラには主人公の真意などお見通しのだろう。

シーラはまるで意に介さずに、主人公の右耳元に唇を寄せる。

それから、何食わぬ様子でそっとささやくという、余裕のリアクションを試みせた。

シーラ、主人公の右耳にささやく。

これによって声の聞こえる方向が『正面』から『右』になる。

★右 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しくたずねる。

『主人公は絶対、まだセックスしたいに決まっている』と、自分の予想に確信がある上で聞いている」

まあ。然様（さよう）でございましたか……♡

てっきりお嬢様は、まだまだされたいのだとばかり思っておりました」※

〈主人公〉

「っ……♡ 違うからあ……♡」

主人公、このホテルに用意されているだろう施設やサービスを挙げて否定しようとする。だが、どれもここでシーラに犯される喜びには勝てない気がして、結局漠然と首を振るのにとどまる。

むろんこの建物内に存在するものは、どれも魅力的だし素晴らしい。

だが、それを利用するのがセックス中毒で、すっかりシーラに価値観を狂わされている主人公では、あまりにもホテル側が不利だろう。

主人公はシーラに意地悪されながら、ずるずるとされるがままになる事が、あまりにも好きすぎる。

身体の大きさでも、口の達者度合いでも負けて。

なすすべもなく、いつまでも、いつまでも気持ちよくさせられる事が、好きすぎるのだ。

SE3 シーラがお風呂で身体を動かす音2

【最初から最後まで流す】

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『穏やかに優しくたずねる。』

『主人公は絶対、まだセックスしたいに決まっている』と、自分の予想に確信がある上で聞いている」

と言う事は。

今日のお嬢様は、既にご満足されて。

もう、どのような愛撫にも反応されない……という事でよろしいでしょうか」※

〈主人公〉

「っう………」

主人公、またも恥ずかしくなって口ごもると、ばつが悪そうに顔をそらす。
昼も夕も今も、主人公はいつも似たような反応ばかり。

そうなってしまうのは、似たような展開を望んでいるからだ。

シーラは一見己の欲望に忠実なようで、実際は主人公の『性癖』に付き合わされている。自分から誘ってきているように見せて、実際は主人公の次の要望を見抜き、あるいは待つ形で、次の行動を選択しているのだ。

シーラ、主人公の右耳に話す。

● 右 0センチ

「『そつと、優しく。』

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで」

残念です……♡

私（わたくし）はまだまだ、して差し上げたい事が沢山ございますのに……♡」

〈主人公〉

「あ……っ♡

……っ、シーラってばっ♡ほんとエロい……♡」

そして、主人公の反応はこれだ。

しかしこの返答では『では、ぜひそれをしてみて下さい』と言っているのと同じだ。

シーラはこれを了承とみなすと、さらにぴったりと身を寄せる。

シーラの大きな胸が柔らかく潰れ、背中に張り付く程密着されて、主人公は否応なしに、その感触を強く意識する。

● 右 0センチ

「「そつと、優しく。」

「「ただ、少しセクシーな感じで。」

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。

「自分がいかに主人公を愛しており、心にも体にも魅力を感じている事を述べていく」
ええ。そうです。

私（わたくし）の全ては、お嬢様に捧げる為に存在しておりますから。

お嬢様のなさる事は、全て魅力的に思え……お嬢様のお身体は、どこをとっても性的に感じられて。

「身勝手にも欲情してしまうのです」

シーラ、言う、言う、右耳にささやく。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「そつと、優しく。」

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。

……ですから、ここからは、セックスではない事を致しましょうか」※

〈主人公〉

「あ♥」

するとシーラは、主人公の両胸を優しく持ち上げ、軽く右耳を吹く。

確かに一応セックスではないかもしれないが、限りなくセックスに直結しているとは思えない行為を、始める。

●右 0センチ

「※軽く、長めに耳を吹く※

そつと、優しく吹く感じで」

ふうっ……

【※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ♡「

〈主人公〉

「あ♡ あ♡ や♡」

主人公の反応などまるで気にしていないかのような態度で……主人公の胸を堪能している。

※ここからシーラはずっと『やや興奮気味』になる。

『これまでと比較して、すべて一段階ほど興奮しているな』という感じになる。

● 右 0センチ

「うっとり。」

主人公の胸の感触が、あまりにも心地いいので。

また、どのように心地いいのかを述べていく」

はあ……柔らかい……♡

お嬢様のお胸は。温かくて。

易々（やすやす）と私（わたくし）の手に支えられて。

とても可愛らしい……♡

【※4回※ ゆっくりめに呼吸する。

満足げに、少し興奮した様子で。

主人公の胸の感触が気持ちいいし、喘ぎ声が可愛らしいので】

はあ……♡ はあ……♡

はあ……♡ はあっ……♡

【うっとり。

満足げに、少し興奮した様子で】

ああ……お嬢様。お嬢様っ……♡

愛しています。愛していますよ……♡

【※8回※ 耳を舐める。

ぺろぺろと戯れるような、まだ軽めの耳舐め】

ちゅ。ちゅっ。ぺろっ……れるお……♡

んっちゅ。んっちゅ。れるおおっ……♡

〈主人公〉

「シーラあ♥ これ♥ これってえっ……♥」

主人公、『どう見てもセックスでしょおっ♥ 何がセックスではない事なおっ♥』と言
って反論しようとするが、まるで言葉にならない。

シーラに触られる事が、あまりにも気持ちよすぎるのだ。

● 右 0センチ

「うっ」と。

満足げに、少し興奮した様子で。

主人公の胸の感触が気持ちいいし、喘ぎ声が可愛いので。

また、主人公がどうするべきかを優しく指示する」

はい……♥

私（わたくし）は今。

お嬢様の可愛いお乳に、マッサージを施しております……♥

お嬢様は、ただお湯に浸かりながら……

【※1回※ 耳にキスする。

さつきよりもねっとりしたキス】

ちゅ。

私（わたくし）に身を委ねて下さいませ。

【※2回※ 耳にキスする。

さつきよりもねっとりしたキス】

ちゅ……ちゅ。

【※3回※ 耳を舐める。

さつきよりもねっとりとした耳舐め】

れろおっ……♡

ちゅるるるっ……れろおっ……♡

【※6回※ 少し早めに呼吸する。

満足げに、少し興奮した様子で。

ますます昂ってきたので】

……はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ。

はあっ……♡

おまけにシーラは、主人公がうまく言えなかった部分を勝手に解釈し、遠慮なく主人公の胸を、耳をむさぼっていく。

……確かにそれらは、先ほどまでのえっちではあまり意地悪されなかった部分だ。
だからシーラは『マツサージ』とかなんとか言って、こんなに触ろうとしてくるのか……。

主人公がそう理解した頃には、もうすべての流れは確定している。

主人公はこれから、シーラが満足するまで、延々この二か所をいじめられるのだ。

〈主人公〉

「あ♥ あ♥ ……うあ♥」

● 右 0センチ

「『少し不思議そうに。』

少しわざとらしく。』

『主人公が物足りなくなってきた、乳首を触ってほしがっている』という事を、理解しながら、解っていないふりをしているので。

『先っぽ』とは乳首の事』

うん……？

どうなされたのでしょうか。

乳房を揉みしだかれて、苦しくなってしまうわたののでしょうか。それとも……先っぽが、切なくなってしまうわたのですか？」

〈主人公〉

「あ。あ。ああ……っ ♡」

まだ何も言っていないのに、シーラが前触れもなく乳首をつまんでくる。

何年も毎日、一日も欠かさずそうしているせいで、完全に力加減を把握している指で。

主人公の硬くなった乳首を、こりこりと、くにくにと愛撫してくる。

主人公の喘ぎ声は途端にわかりやすく低くなって、深く感じているのがバレバレだ。

シーラの乳首いじめは気持ちよすぎる。

ずっとされたすぎて身もだえする主人公は、とっくにこれをマツサージなどと認識していない。

● 右 0センチ

「【穏やかに優しく。】

優しい声のまま、えっちで意地悪な指摘をしていく」

お間違いなさそうですね」

シーラ、言うと、右耳にささやく。

それから、ますます乳首への愛撫を念入りにしていく。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

優しい声のまま、えっちで意地悪な指摘をしていく。

乳首を念入りに愛撫しながら話している」

だってお嬢様ったら……先程から、逃げるように身を振（よじ）られ。
その癖、大変ご期待なさっているようですから……♡」※

〈主人公〉

「あっ……!!」

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

優しい声のまま、えっちで意地悪な指摘をしていく。

乳首を念入りに愛撫しながら話している」

では、こちらも。丹念にマッサージして差し上げます。
ほら……このように、親指と人差し指の腹でしっかり摘まんで。
優しく、優しく。

こねこね、こねこねと解（ほぐ）してゆきましょう」※

SE 4 シーラがお風呂で身体を動かす音3

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあ

はあ ♡ はあ ♡ はあ……っ ♡

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「【穏やかに優しく。

優しい声のまま、主人公の乳首について言及していく。

乳首を軽く引っ張ったり、捏ねたりしながら話している】

……おや。

何（なん）だか今日は、硬くなられてもどこか柔らかく、よく伸びますね。
ほら。

くに。くに。くに。くに ♡

【乳首を伸ばす様を、見せつけているイメージで】

手触りが心地よくて、ずっと捏（こ）ねてしまえそうです…… ♡

【うっとり】

……ふう……凄い。

くい。くい。くい、くい。

ぐに、ぐに、ぐに、ぐに ♡ ※

〈主人公〉

「あ ♡ あ ♡ あ……っ ♡」

シーラ、主人公の乳首で遊びながら、さらに意地悪な指摘をしてくる。

SE5 シーラがお風呂で身体を動かす音4

【最初から最後まで流す】

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

優しい声のまま、えっちで意地悪な指摘をしていく」

ああ……お嬢様だったら、お身体がともお熱くなられています。それだけ興奮なさっているのでしょうか。

『だが、このままではいけない』という感じで。

少しわざとらしく」

……ですが、このままでは、少しのぼせてしまうかもしれません。

【ここでふと思いついたように。

だが、実際は、最初からこうするつもりだった】

そうだ。

お嬢様。お立ち下さいませ。

窓辺へ。このホテル自慢の。夜景の見える窓辺へ参りましょう」※

〈主人公〉

「え……っ？」

シーラ、言い終えると、主人公の反応を待つ事もなく、主人公の身体を支えて立ち上が

る。

二人には体格差がある。

シーラが望めば、主人公の身体は、この通り簡単に持ち上げられてしまうのだ。

SE 6 シーラがお風呂場を歩く音

【最初から最後まで流す】

【SE 7と同時に流す】

SE 7 主人公がお風呂場を歩く音

【SE 6と同時に流す】

【SE 6が止まるタイミングで一緒に止める】

こうして主人公はあつという間に窓辺へ連れていかれ、一面ガラス張りの前に立つ。

だが、主人公はこの突然の提案に対して、逃げないし抵抗もしない。

こうなる事を嫌がっていないし、むしろ、最初からこうなるのではないかと思っていた節さえあるからだ。

窓にゆらりと主人公が映り、そこに今度は主人公の呼気がかかる。

透明なガラスが、興奮と期待の象徴によって曇っていく。

シーラ、再び背後から頭を近づけ、主人公の左耳に話しかける。

これによって声の方向が『右』から『左』になる。

● 左 0センチ

「【穏やかに優しく。

主人公をよい位置に誘導している】

さあ。こちらへ」

〈主人公〉

「シーラあ……♡ これえっ……♡」

主人公、窓とシーラに挟まれる格好になりながら、甘えた声で首を振る。

だがこれも、もはや『早くして』と懇願しているようにしか聞こえないだろう。

シーラもそれをわかっている。

だから、今度は躊躇なく行為を進めていく。

●左 0センチ

「穏やかに優しく。」

あたかも、それが当然で、何も問題がない事かのように言う」
ええ。ご想像の通りでございます。

お嬢様はこれから。

このガラスさんに、お乳首を気持ちよくして頂くのです」

シーラ、左耳にささやく。

そっと、恭しく主人公の両胸を持ち上げながら、あまりにも恥ずかしく……でも、絶対に気持ちいい事をさせようとしてくる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

あたかも、それが当然で、何も問題がない事かのように言う」
ほら……このように。下からお乳を持って差し上げますから。
熱くなった乳首を、窓さんに擦り付けましょう？」※

〈主人公〉

「あ……！ あ ♡ あ ♡ あ ♡」

主人公の硬く上がった乳首がシーラの手に導かれ、ガラスに触れる。

それは少しひんやりとした心地よい感触で、主人公はため息を漏らしながら目を閉じる。
ここに擦れると、とても気持ちいい。
それしか考えられなくなっていく。

シーラ、主人公の両胸を持って、乳首を、窓ガラスに丁寧に擦り付けていく。

SE8 シーラが主人公の乳首を、ガラスに擦り付ける音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【次の『シーラ』のセリフと同時に流す】

【▲1 まで流し続ける】

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく
「【穏やかに優しく。】

あたかも、それが当然で、何も問題がない事かのように言う】

上から、下へ。上から、下へ。

上から下へと押しつけて。

硬くなった先っぽを、なだめて差し上げましょう。

ふふ。ひんやりして気持ちいいですね？

【※6回※ 少し早めに呼吸する。

満足げに、少し興奮した様子で。

だんだん荒くなっていく】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあっ……♡

【穏やかに優しく。

先ほどまでより、少し興奮気味に】

窓でするオナニ―は、とっても気持ちいいですね……♡

それに今日（こんにち）は景色も最高。

お嬢様は美しい夜景を見下ろしながら、

【※少しだけ媚びた口調で※ 言う。

『嘘喘ぎ』をする。

主人公の心情を推測して話している】

『あんあん♡ あんあん♡ あんあん♡』とできるのですよ」※

〈主人公〉

「あ……！ あ ♡ あ ♡ あ ♡」

何度も擦り付けられた乳首が、窓にいじめられる快感を覚えて、どんどん抵抗をなくしていく。

うっとり痺れて、身体全部の神経を集中させるくらい、ガラスから与えられる快感に夢中になっていく。

このように主人公はシーラに自由にされる振りをして……自分から乳首をガラスに押し付け、堂々とオナニーを始めていた。

● 左 0センチ

「【※6回※】 少し早めに呼吸する。

満足げに、少し興奮した様子で。

だんだん荒くなっていく」

はあ、はあ、はあ。

はあっ、はあっ、はあっ……♡

【穏やかに優しく。

先ほどまでより、少し興奮気味に」
少し強くしましょう。

【※7回※ 擦るさまを擬音で表現する。

だんだんゆっくりになる】

ごし、ごし。ごし、ごし ♡

ごしし……。ごしし……。

ごしし……。♡

【うっとりと興奮気味に。

目を閉じている主人公に、外の光景を言葉で描写していく事で、興奮を煽る。

また、これによって目を開けさせようとしている】

お嬢様。ご覧になって下さいませ」

〈主人公〉

「……？」

だがここで、シーラが新たなアプローチを始める。

すっかりとろけきって目を閉じた主人公に、再び目を開けさせ。外の光景を、外にいる人々の事を意識させようとしているようだ。

● 左 0センチ

「うつとりと興奮気味に。」

目を閉じている主人公に、外の光景を言葉で描写していく事で、興奮を煽る。
また、これによって目を開けさせようとしている」

学園は、あの辺り。

私（わたくし）達の屋敷は、あちらの方にございます。

あそこの赤い屋根の建物の辺りが……ホテルに入る時に通った道になります。

「ふと、今気づいたかのように。」

少しわざとらしく。

何の根拠もない事を、主人公を興奮させるためだけに言っているのだ」となる……。

もしあの辺りから見上げたら、私（わたくし）達が見えてしまうのでしょうか」

〈主人公〉

「なっ♡」

当然、主人公はこの新しいプレイにのってしまふ。

主人公はこのシーラの指摘を受け、思わず目を開けると、シーラが今描写したであろう場所を探し、ますます全身を熱くする。

『……もし、そこに人がいたらどうしよう』そう思ったからだ。

だが、仮にそうだとして、主人公が視認できるはずはない。

あの位置に人間がいたとして、それはどうあろうと、ここからでは豆粒サイズ未満に感じられるほど遠い。

それは逆も然りだ。

たとえ見る側の視力がどれだけ優れていようと、相手からこちらが見えるとは、到底思えない距離だった。

シーラもちろん、それをわかっていて言っているのだろう。

わかっているからこそ、ここで堂々と『窓辺セックス』をしたがっているのだ。

だがそれでも、主人公の心には不安と、それを上回る興奮がとる。

『もし見られていたら』というありえない空想に自ら飛び込み、あたかもそれを真実のように思い込み始めているのだ。

● 左 0 センチ

「『優しく、ぼそっと。』

自分達からは何の手も打てない事を強調し、より主人公の羞恥心を高めていく」

でも、例えそうだった所で、お嬢様はもう我慢できませんね」

〈主人公〉

「あ♡」

声が震える程たかぶり、今にもおかしくなりそうな主人公に、シーラが次なる悪戯を始める。

意地悪にささやき、主人公に、自ら挿入を求めるよう促してくる。

シーラ、左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

優しい声のまま、えっちで意地悪な指摘をしていく」
だって。

そろそろ、中をほじって欲しくなれているでしょう？

お嬢様は今、

【※全く変わらない口調のまま※ 言う。

主人公の心情を予測して、それをあくまで淡々と述べる事で、主人公の羞恥心を煽っている」

『膣穴（ちつあな）をシーラの指に犯されて、奥の疼きをどうにかしてもらいたい』

『もう欲しくて欲しくて、切なくて、おかしくなりそう』

【穏やかに優しく。

優しい声のまま、えっちで意地悪な指摘をしていく】

……と、お思いになられているのではありませんか？」※

▲1 ここでSE8がストップする。

SE9 シーラが主人公の膣内に、指を挿入する音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「ああああっ♥」

だけど主人公は、まだ、少しくらいは猶予があるだろうと思っていた。こんな事を言っただけでも、シーラがいきなり挿入してくる事はない。

そう考えていたのだ。

〈主人公〉

「あ。あ♥ シーラあっ……♥ シーラああっ♥」

だが、今日は違ったらしい。

シーラは遠慮なく背後から主人公の膣内に己の指を差し込むと、そのまま出し入れを始める。

ちゅぽちゅぽ、ちゅぽちゅぽと慣れた手つきで、主人公の膣内を行き来し、容赦なく快感を与えてくる。

●左 0センチ

「優しく、しれっと。」

まるで主人公の反応を意に介さずに言う。

『制止する主人公の声が聞こえなかったので、もう、主人公の性器に指を挿入してしまった』という意味で言っている」

ん？ ああ、申し訳ございません。

水の音で、お声が遠くて……。

勝手ながら、もうお入れしてしまいました……♡」

SE10 シーラが主人公の膣内に、指を出し入れする音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【▲2 でSE11と切り替わる】

● 左 0センチ

「【※息づかいのみで※ 表現する。
うっとりとしため息をつく。

主人公の膣内の熱さを堪能している】

ん……♡

【※4回※ 少し早めに呼吸する。
満足げに、少し興奮した様子で。
だんだん荒くなっていく】

ふう……♡

ふうっ。ふうっ。ふうっ……♡

【※息づかいのみで※ 表現する。

うっとりのため息をつく」

はあ………♥

「うっとり。」

主人公の膾内の状態について述べる」

凄いです。

今日（きょう）はいつもより一本多く指をお入れしたのに、まるで抵抗がない………♥
お嬢様は、犯される準備がお上手ですね………♥」

シーラ、左耳にささやく。

〈主人公〉

「あっ♥ あっ♥ ああっ♥
あ♥ あ♥ ああ♥」

主人公、シーラの指の動きに支配され、指の位置に、動きに合わせて震え、びくびくと小さく喘ぐ。

教室の時と違って好きなように声が出せる上、この浴室は声がとても良く響くから、快感も増幅してしまう。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

あたかも、それが当然で、何も問題がない事かのように言う。

また、あくまでマッサージの体続ける」

さあ、腰を落として、窓に深く手を付いて。

私（わたくし）の方へお尻を突き出し、一杯気持ちよくなれる格好になりましたよう？

お嬢様の、一番奥までしっかり。

マッサージして、差し上げますから……♡」※

シーラ、ここでささやくのをやめて、通常の話し方に戻る。

●左 0センチ

「※6回※ 少し早めに呼吸する。

満足げに、少し興奮した様子で。

だんだん荒くなっていく」

ふう、ふう、ふう。

ふう、ふう、ふう……っ」

〈主人公〉

「あっ♡ あっ♡ ああっ♡

主人公が犯されながら涙目で見下ろすのは、外の世界だ。

誰がいるかなどわからない。だが、いるかもしれないと思いながら、何回も真下を見回し、その度に起きてもないことや、起こりそうもない事を空想してますます感じている。

というか、もし仮に本当に警戒するなら、見るべきは下だけじゃない。

だが、そんな事にすら考えが及ばぬほど、主人公は快樂に浸り、溺れている。

● 左 0センチ

「ふと気づいたように。

少しわざとらしく」

ん……？

お外が気になるのですか？

「わざとらしく、少し間が空く。

窓の外の様子を見てから話し始めるイメージ」

確かに、もしあそこにどなたか居（お）られたとしたら。

遠すぎて、はつきりとは認識できなくても……。

『ああ、あそこに裸の女性がいて、後背立位（こうはいりつい）でやられているようだ』
という事位は、解ってしまいかもしれませんね」

▲ 2 ここでSE10と11が切り替わる。

SE 11 シーラが主人公の膣内に、指を出し入れする音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【▲ 3 で一段階速度が速くなる】

【▲ 4 でフェードアウトする】

シーラ、そう言いながら、指の動かし方や角度、早さを変え、ますます主人公の膣内を刺激していく。

● 左 0センチ

「【穏やかに優しく。】

あたかも、それが当然で、何も問題がない事かのように言葉責めをしていく」

このように指を押し込まれて。

ぬちゅぬちゅ、ぬちゅぬちゅと出し入れされ。

あられもなく喘いでいると……認識され。

お嬢様の可愛らしいお声を想像しながら、オナニーのおかずにされてしまうかもしれない
せん」

〈主人公〉

「あ♡ あ♡ あ♡ ……つうう……♡」

主人公、目から涙がこぼれるほど感じながら、ぎゅっと目をつぶる。

もう、この指摘だけで主人公はイきそうだ。

目を閉じていても、開けていても、いやらしい空想は止まらない。

もう、ほとんど事実のように認識して、見られているかもしれないセックスに溺れていく。

それでもシーラは、攻めの手を緩めない。

主人公がいくのを、今か今かと楽しみにしているのだ。

シーラ、ダメ押しのように、左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

あたかも、それが当然で、何も問題がない事かのように言葉責めする。

また、たとえこの行為が誰かに見られようと、見た側には何の責任もないだろうという事を強調する。

当然、誰かが見ている可能性はないと把握した上で言っている」
ですが、もしそのような事になっても。

お相手は何も悪くありませんね。

お嬢様は、大切なお身体を自ら見せつけ。

自ら恥ずかしい事をされているのですから。

例え見られてしまっても、文句など言えず。

むしろ『こんな姿をお見せして申し訳ございません』

と、謝らなくてはなりません……♡」※

〈主人公〉

「……っ ♡ あ ♡ あ ♡ あ……♡」

シーラ、ここでささやくのをやめて、通常の話し方に戻る。

● 左 0センチ

「穏やかに優しく。」

優しい口調のまま、さらに主人公を煽っていく。

また、こんな主人公には自分しかいないという事を主張する」

ああ、お嬢様は本当にいけない方です。

駄目な事だと理解しながら、人に見られそうなセックスの虜になられている。

このようなお嬢様には……私（わたくし）が一生。
ついていて差し上げなくてはなりませんね……♡」

〈主人公〉

「あっあ ♡ あっあ ♡ あっあ ♡ あああっ ♡」

そうだ。その通りだ。

主人公にはもう、絶対にシーラしかいない。

このような主人公の狂った性癖を理解し、その上で何事もなかったかのように付き合い、愛してくれる人間など、この世でシーラしかいない。

そんな事はとくにわかってるから、シーラと生きていくためなら何でもするから、もつと気持ちよくしてこのままイかせてほしい。

そう思いながら主人公は窓に手を付き、ひたすらに喘ぐ。

絶頂がもう、近づいてきている。

▲ 3 ここでS E 1 1の速度が、一段階早くなる。

シーラ、再び左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『穏やかに優しく。』

主人公がもうイきそうな事を指摘し、居もしない観覧者がいる事を想定してイかせようとする」

ほら……お嬢様。

もうイきたいでしょう？

どうぞ。

あの位置で見ているかもしれない方へ向かって、

【※少しでも媚びた口調で※】

『』で囲まれた箇所を言う。

『嘘喘ぎ』をする。

主人公の心情を推測して話している」

『あんあん♥ あんあん♥ あんあん♥ あんあん♥
と喘ぎながら、目一杯イきましょう。』

『はあはあ。はあはあ。はあはあ。はあはあ
と乱れながら。』

『くうう……っ♥』と身体を反らして。

いく瞬間を、見せつけて差し上げましょう……♥
ね？」※

〈主人公〉

「あっあ♥ あっあ♥ あああっ♥ あー……♥」

シーラ、ここでささやくのをやめて、通常の話し方に戻る。

● 左 0センチ

「【※9回※ 少し早めに呼吸する。』

満足げに、少し興奮した様子で。

だんだん荒くなっていくな」

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあつ。

はあ、はあ、はあつ……」

〈主人公〉

「シーラあ♡ ……シーラあ♡

いく。いくいくいくつ。いく♡

イっちゃううう……♡」

だから主人公は、もう降参した。

『わたしは、いけない妄想をしては喜んで、その度に、いつもより気持ちよくなっていく変態だ』

『そんな歪んだ性的嗜好を満たすため、最愛の恋人に、毎回こんなセックスをさせて、存分にいく変態だ』

それを身体のコまで理解しながら、絶頂を宣言した。

● 左 0センチ

「少し余裕なさそうに。

少し早口になる。

主人公がいよいよいきそうなので
ええ……どうぞ……どうぞ……。

【※9回※ 早めに呼吸する。
満足げに、興奮した様子で。
だんだん荒くなっていく】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあっ。

はあ、はあ、はあっ……。

【※ここで主人公が絶頂する※
余裕なさそうに。

深く、荒く息を吐く】

はああああっ………
「」

▲ 4 ここでSE11がフェードアウトする。

〈主人公〉

「あああああ……♡」

SE12 主人公がよろけて窓に手を付く音

【最初から最後まで流す】

かくして、主人公は今日五回目のガチイキをした。

シーラの言う通り、窓の向こうで誰かがこちらを見ている想像をしながら、あられもなくあんあん喘息で、思い切り、達した。

〈主人公〉

「はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡」

はーっ♡ はーっ♡ はーっ……♡」

● 左 0センチ

「【※6回※】 早めに呼吸する。

満足げに、興奮した様子で。

だんだんゆっくりになる」

はあ、はあ、はあ。

はー。はー。はあ……。

【※息づかいのみ※ で表現する。

満足げにため息をつく】

ふう……♡

【とても優しく。たつぷりと主人公を褒める】

可愛くイけましたね。

今回もお上手でしたよ……♡

素晴らしいイキ顔でした……♡」

だけど、そんな主人公にも、シーラは変わらず優しく、だが荒い呼吸でささやく。

シーラはよほど、今回主人公がイク様が気に入ったようだ。

達した後もしつこくこうして……また、主人公がじゅわつと濡れてしまいそんな事を言
って煽ってきた。

シーラ、再び左耳にささやく。

★右 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

優しい声のまま、えっちで意地悪な指摘をしていく」

もし、お嬢様がイク様（さま）と。

この、とろとろに解（ほぐ）れたおまんこをご覧になられた方が居（お）られたら。
その方は一生……今日の事を忘れられないでしょうね……♡ ※

【※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ♡
「

ここでフェードアウトして終了。